

本職（愛知淑徳大学ビジネス学部教授）に携わるようになってから、2、3、4年生を対象としたゼミナールの受け持っている。その学修活動の一環として毎年、夏休みにゼミ合宿を行っている。「合宿」と言っても、学生に何か課題を与えて、作成・プレゼンなどを行うようなガチガチの勉強を行うわけではなく、一泊二日で施設見学などを行ってきたのが通例である。アカウンティングを専攻するゼミなのでこれまで経済、金融などに関連する施

「会計」とは「説明すること」

であった監査法人にも訪問したりしている。今年の夏も本学の卒業生が当該監査法人に就職したこともあり、訪問、見学、レクチャー、監査法人職員と学生との座談会などを行ってもらった。今回はその中で監査法人のパートナーの方が学生向けに話された「会計・監査」の話が大変興味深かったのを紹介したい。「会計」、英語では、「accounting」。これは動詞にすると「account for」。つまり、「説明すること」となる。我が国では、「会計」という「計算すること」を確かに企業での会計、経理の仕事といえば、仕訳を起す「audience」を意味しており、「聞く」と「が本来の意味である。即ち、監査人は経営者等から話を聞き、それを掘り下げ、核心にせまり、財務諸表の適正性について判断するのである。決して、世間での一般的印象である「チェックすること」だけではないのである。今後の監査は、「チェックすること」はAIにゆだねられ、本来の意味である「聞くこと」に特化した深度ある監査が行われることが期待される。

「会計」、「監査」の本来の意味が専門家にだけではなく、広く一般にも正しく認識・理解され、社会全体の知見・見識が深まっていくことを願いたいところである。

経営者に求められる

リテラシーの重要性

設（東京証券取引所、日本銀行、自動車工場、日経新聞社、国会議事堂など）を訪問、見学し、レクチャーを受けたりするという内容である。その中で私が前職



愛知淑徳大学ビジネス学部教授
公認会計士 前田 篤

前田 篤

まえだ・あつし 監査論、会計実務。慶応義塾大学経済学部卒業。監査法人伊東会計事務所（現PWC）あらた有限責任監査法人）などを経て現職。1959年生まれ。

して、数字に誤りがあつてはならないわけで、ひたすら電卓片手に計算しているイメージが強い。

しかしながら、「会計」の本来の意味は、「説明すること」なのである。つまり、経営者が複式簿記の手法を使って作成された財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書など）を使って、その利用者たる利害関係者（株主、投資家、銀行、取引先、従業員、課税当局、規制当局など）に我が社の